

ナバレーテ 《聖ヤコブの殉教》
——ネーデルラント美術受容を中心に——

河本 真夕 (神戸大学)

ナバレーテ・エル・ムード(1538 頃-1579) は、スペイン国王フェリペ 2 世の王付き画家として、エル・エスコリアル修道院で活動し、重用された唯一のスペイン人画家である。当時カトリック改革を推進した王の宗教観が反映されたエスコリアルの内部装飾において、彼の代表作《聖ヤコブの殉教》(1571 年)は、殉教図像の模範例として挙げられてきた。本発表では画中の聖ヤコブ像に着目し、ナバレーテの様式とフェリペ 2 世の意向との関連を考察する。

先行研究では、まず構図や風景表現にティントレットなど王が好んだヴェネツィア派の影響が指摘されてきた。それとは別に、画面の中心には斬首中の聖ヤコブの残虐な描写がみられる。この聖ヤコブの図像は、後世のスペイン画家に多く取り入れられたことから、模範例と見なされたと考えられるが、実際にいかなる点が評価されたのかについては具体的に検討されてこなかった。

本発表では、涙を流す悲劇的な聖ヤコブの顔貌表現に注目し、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《十字架降下》(1435 年)の聖母マリアからの影響を新たに指摘する。ナバレーテは 1566 年、フェリペ 2 世の命でロヒール作品の修復や模写を行っており、その様式の習得を求められていたことが窺える。さらに首に刃が切り込む生々しい表現には同時代のネーデルラント画家ミヒール・コクシー作《ダヴィデとゴリアテ》(1543 年以降)の影響が指摘できる。コクシーはナバレーテと同様にロヒール作品の模写をフェリペ 2 世から任じられており、ナバレーテにとってはロヒールの様式を熟知した先駆的存在であった。すなわち本作において、構図の着想源はヴェネツィア派であり、その殉教の表現の着想源はロヒールやネーデルラントの作品であったといえる。

これを踏まえて、ネーデルラント美術の同時代評価を、修道院長ホセ・デ・シグエンサの『ヒエロニムス修道会の歴史』(1605 年)をもとに検討する。シグエンサは、同時代の美術のデコールムを巡る議論や神学思想を反映しつつ、フェリペ 2 世のエスコリアルの絵画作品評価を記述している。これによるとネーデルラント美術は、イタリア美術と双璧をなす王室コレクションの潮流として高く評価されたが、それはカトリック改革で新たに美術の規範となった「写実性」と「情動性」がロヒールを筆頭としたこの美術の様式に認められるためであった。本作の聖ヤコブにもこの規範が備わると言及されており、さらに、ナバレーテの最晩年作《聖ラウレンティウスの埋葬》(1579 年)の聖人表現にも同様のことが看取できる。以上から、フェリペ 2 世が望んだカトリック改革期の美術とは、ヴェネツィア派の様式を取り入れながらも、ネーデルラント美術、特にロヒールの様式を殉教場面に取り入れたものであったと考えられ、ナバレーテはこの王の意向を理解して殉教場面にロヒールの様式を選択的に受容したと結論づける。